

増補 コロナ禍における祭りの執行とその意識 ～神戸山王まつりの場合～

小川 和 英

はじめに

令和2年・3年の祭りは、日本全国どこでも新型コロナウイルスの感染状況により、苦渋の選択を迫られ、神事のみで他の行事は中止、「三密」にならない範囲で規模を縮小して行うなど、例年の祭りからはかなり掛け離れた状態で実施せざるを得ない状況に追い込まれた(注1)。このような状態が2年も続くと、少子化による人手不足で祭りの存続が危ぶまれているところへ、さらに追い打ちを掛けられているという危機感が強まった。

このような状態のなかで、祭りに携わる人々は、令和2年・3年の祭りをどのように行ったのか。特に、最初の計画に対して、「緊急事態宣言」などが出されることによって、どのように計画を変化させ対応して祭りを執行したのか。また、そのような祭りは、どのような意識のもとで行われたか。さらに、令和4年の祭りを約1カ月後に控えた現在、何を考えているのか。

本稿は、上記のような課題を、岐阜県安八郡神戸町の「神戸山王まつり」(注2)を例として、探っていきたい。

1 例年の神戸山王まつり

(1) 祭りの特色及び構成

岐阜県安八郡神戸町で毎年5月3・4日(以前は4月13・14日)に行われる「神戸山王まつり」(通称「神戸の火祭り」「神戸祭り」)は、日吉神社の神輿渡御を中心とした祭りで、県重要無形民俗文化財に指定されている。この祭りの特色は、境内の日吉七社に各々一基の神輿(計7基、県重要有形民俗文化財)があり、その担ぎ方は、走りながら担ぎ手が交代していく完全な「走る神輿」で全国的にも珍しい。さらに、かつて日吉神社と関係が深かった善学院の法印が、神前と境内の三

重塔(国指定重要文化財)で読経するなど神仏習合的な面を残している。また、大津坂本の日吉大社の「山王祭り」を意識した面や、「夜叉ヶ池伝説」を伝える石原傳兵衛と毎年氏子会で選出される祭主による御旅所神事、「王飯」といわれる特殊神饌、深夜に松明を焚いて行う渡御(火祭り)、松明や梵天・旗などで信号を送って神輿の渡御を行うなど、特色の多い祭りである。

祭りに関わっている人数は、実人数で約1,500人ほどになり、大規模な祭りである。

例年の祭りに関する取り決めは、10区で構成している日吉神社氏子会(以後、氏子会と略す)の執行部(6名)が原案を作成し、執行部と理事(各区1名)から成る役員会で検討し、氏子総代会(48名)で決定する。また、祭主の決定は氏子会で内定し、役員会のメンバーと別の組織である元六カ村の氏子総代が話し合い、正式に決定する。

なお、祭りを構成している地域は、大字神戸のうちの10区と元六カ村の6区(神戸町5区、隣接の大野町1区)、さらに応援区として5区(全て神戸町)の21区である。応援区は時代によって変化している。江戸時代までは、かつての平野荘25カ村(現在の神戸町の大部分と近隣の大野町・池田町・大垣市のそれぞれ一部)で構成されていた。これは、日吉神社が延暦寺の荘園である平野荘の鎮守社であったことによる。そのため、祭りは現在も「郷祭り」の側面を有している。

(2) 行事

①5月1日

10区の各町内は、神社境内に幟や十二灯・下馬立てを立て、さらに自町内の所定の場所にも幟を立てる。また神輿を神輿蔵から出し、神社の拝殿に飾る。(神輿の飾り付けは、拝殿で行う町内と、事前に殆ど終わっている町内とがある。)



写真1 令和元年 朝渡御



写真2 令和元年 還御（御旅所神事）

午後8時、祭主が社務所から氏子総代とともに出発し、神前で祭主報告祭を行う。

②試楽 5月3日

午後1時から若者や子どもによる中神輿が町内を渡御する。

午後6時、善学院の法印が社参し、神前と三重塔で読経する。

午後7時、石原傳兵衛が元六カ村の氏子総代とともに試楽参りを行う。

午後8時、祭主が祭礼事務所から氏子総代とともに出発し、試楽参りを行う。

③本楽

【朝渡御】

5月3日

午後9時30分、神輿が渡御する順路を、事前に猿田彦の面を付けた根付きの神と太太鼓が渡御する。

午後11時、祭主行列が祭礼事務所を出発し、神社へ向かう。

5月4日

午前0時過ぎ、祭主が神社拜殿に到着し神輿に拝礼すると、七基の神輿が順に御旅所まで渡御す

る。

【本楽祭】

午前10時30分より、神社拜殿で本楽祭が行われる。

【昼渡御】

午後1時、7基の神輿が順に町内を渡御する。現在は担ぎ手不足から休止している。

【還御】

午後4時、神輿が渡御する順路を、根付きの神と太太鼓が渡御する。

午後5時、王飯などの神饌をもった石原傳兵衛の行列が、社務所を出発し、御旅所へ向かう。同時に祭主の行列も祭礼事務所を出発し、御旅所に向かう。

祭主と石原傳兵衛が御旅所到着後、神輿の前で盃事を行う。

一方、神社では拜殿の屋根から、紅白の紙を付けた22本の御幣を扇型に束ねた力紙を投下する。それを奪い合い、その断片が御旅所へ到着し、最初に出発する神輿に投げると、七基の神輿が順に神社拜殿まで渡御する。

7基の神輿が全て到着すると、神抜きが行われ、「帰り神輿」となり各町内の神輿蔵まで戻っていく。この場合の担ぎ方は、普通の「練る神輿」である。

2 コロナ禍の神戸山王まつり

(1) 令和2年

この年は突如として生じたコロナ禍の蔓延により、日毎に計画の縮小が繰り返されていった。

2月17日の氏子会の氏子総代会の時点では、例年と同じ祭りを行う予定で、祭主も内定した。しかし、3月10日の祭主決定時に、新型コロナウイルスの感染状況によっては、祭りの縮小もあり得るとなった。氏子会会長は、「その判断は、近隣の祭りや、大津坂本の日吉大社（の判断）なども参考にすると発言している（注3）。3月23日の氏子総代会では、口頭で祭りの縮小案を提示し、内定されている。3月31日には、氏子会役員会のメンバーと元六カ村氏子総代が、七結社（若者の結社）代表、露天商代表を加え臨時合同会議を開き、新型コロナウイルス感染症対策として、「三密」を避けるために、「神輿は拜殿での飾り神輿のみとし、渡御は行わない。幟などは神



写真3 令和2年 拝殿の祭り中止ポスター



写真4 令和2年 本楽祭

社境内のみとし、境内では行灯・提灯を灯すが、露店は自粛してもらう。ただし、5月1日の祭主報告祭、3日の試楽参り、4日の本楽祭の神事は、関係者のみで行う」とした。

ところが、4月16日に「緊急事態宣言」の対象が全国に拡大され、特に岐阜県は「特定警戒都道府県」に位置づけられた。そのため、16日に氏子会の執行部が開かれ、翌17日付けで神戸山王まつりに関する行事全ての中止が決定された。それにともない、決定していた祭主も「取り消し」となった。神事は神職のみで「天下泰平・五穀豊穰・厄疫退散を祈念」することになった。実際には、5月3日18時と4日10時30分の神事には、氏子会執行部・石原傳兵衛（4日のみ）が平服で非公式に参拝した。

(2) 令和3年

令和2年と同じように2月17日の氏子総代会では、例年通り実施する予定であり、祭主も昨年「取り消し」となった人が再選された。しかし、3月10日の元六カ村との話し合いで縮小もやむを得ないとなった。3月23日の氏子総代会

で、令和2年の最初の案（「神輿は拝殿での飾り神輿で、渡御は行わない。幟などは神社境内のみ」）をもとに、神事は例年通りとし、新たに仮神輿を製作して町内を渡御する計画が決定された。なお、服装については、祭主は袴、氏子会執行部は紋付き羽織袴と従来通りだが、その他の氏子総代は、特例として略礼服となった。

ところが、4月23日に岐阜県において、独自の「第4波非常事態宣言」が出された。そのため、同日に臨時役員会が開かれ、拝殿での七基の飾り神輿は中止、その代わりに、各神輿蔵で飾り神輿を公開、境内の幟も本殿前の一対だけとし、それ以外は予定通り実施することにした。

【実施状況】

5月1日

午前8時から、宇佐宮・三宮の神輿蔵で神輿の飾り付け（他の五基の神輿は、事前に飾り付けを終えている）。各神輿蔵では、飾り神輿を公開できるように準備。

午後8時、祭主が社務所から氏子総代とともに出発し、神前で祭主報告祭。

5月3日

午前8時から、拝殿に古神輿を飾る。

午前10時から午後3時まで、各神輿蔵で飾り神輿を公開。

午後6時、善学院の法印が社参し、神前と三重塔で読経。

午後7時、石原傳兵衛が人数を減らした元六カ村の氏子総代とともに、試楽参り。

午後8時、祭主が祭礼事務所（社務所）から氏子総代とともに出発し、試楽参り。

5月4日

午前10時から午後3時まで、各神輿蔵で飾り神輿を公開。

午前10時30分より、本殿で招待者を例年より減らして本楽祭を実施。

午後2時から3時まで、本年のみの特例として仮神輿一基による町内渡御が行われた。

仮神輿は、担ぎ棒の長さは約2m、台座は約60cm四方、四本の柱は高さ約60cmで、四方と上部に白布を巻いてある。

午後2時前に、武者1名が拝殿前に到着し、その後祭主が着座する。拝殿前に置かれた仮神輿に、神官が日吉七社の神を移す。午後2時、仮神輿に



写真5 令和3年 神輿蔵での飾り神輿公開



写真6 令和3年 仮神輿

祭主が一礼すると、仮神輿は出発する。コースは神輿を管理している町内を巡回し、祭主が迎える神社まで戻る。その大部分は、朝渡御・昼渡御・還御のコースと重なっている。

行列は、先頭に神官、次に中神輿の鈴を持ちそれを振る7名（各社1名）、4名によって担がれた仮神輿、氏子会役員と続き、声を出さず静かに歩いて回る。担ぎ手は各社がほぼ自分の町内を交代して担ぐ。担ぎ手及び鈴持ち手は、シャツ・パンツ・足袋・団七（法被）・鉢巻き・帯の正装で参加する。なお、全員がマスクをして、担ぎ手の手と担ぎ棒については、消毒係の氏子総代が交代のたびに消毒を行った。

3 祭り実施状況の比較

令和元年（例年）・2年・3年の神戸山王まつりの行事を比較すると次頁の【表1】のようになる。

4 コロナ禍における祭り執行に関する意識

(1) 令和2年

氏子会会長は「悩んだが、神輿を出さないこと

になった。（祭りを）やりたい気持ちである」と言っている（注4）。神戸山王まつりは神輿中心の祭りであるから、渡御はできないまでも飾り神輿として、拝殿に置きたいという意識が強かったと思われる。しかし、祭りを執行する立場としては、新型コロナウイルスの全容が不明であり、祭りに係わる人々の不安感も大きく、さらに「緊急事態宣言」が出され、町内からも感染者が出たという状況では、神職による神事のみ実施して、他の全ての行事を中止せざるを得ないという判断は、仕方が無かったのではないと思われる。

なお、神輿の渡御がなく、拝殿における飾り神輿という状態は、戦時中に実施された前例がある。

(2) 令和3年

コロナ禍も2年目になると、社会全体が新型コロナウイルスに対して、多少の余裕も出てくるようになってきた。氏子会会長は「昨年のような中止はしたくない」と同時に、「何もしないのは、祭りの衰退を現す」と述べている（注5）。これは、神輿を出さないことに対する危機感が増し、拝殿での飾り神輿が中止になっても、それでも「何が出来るか」という発想で、神輿蔵での飾り神輿の公開という方法に切り替えたことに繋がったと思われる。

神戸では神輿蔵での公開という発想は元々ないので、最初は戸惑いもあったが、各町内がそれぞれ工夫を凝らし、一種の競争のようになったといわれている。これは高山祭などの屋台蔵での公開の影響もあるのではないと思われる。なお、神輿を飾る事にこだわる理由は、祭り関係者によると、「神輿の飾り付けは、一種の口伝で、毎年飾らないと飾り方が伝承しにくくなる」といわれている。

この年の新しい動きは、仮神輿による町内渡御である。祭り関係者は、2年間まともな祭りが出来ないことにより、祭り離れが加速するのではないかという危機感があり、「神輿一基でも出して、神社境内の中だけでも担げないか」という意見もあったが、やはり「密」になるということで、「密」にならない「仮神輿による渡御」という方法が考えられたといわれている。「仮神輿」の発想は、この状況下で「何が出来るか」ということと、今年の日吉大社の方法や昨年の他の地域での方法なども参考に考えられたとされる。なお、「基本的

【表1】

	令和元年(例年)	令和2年	令和3年
5月1日	神輿出し 幟立て 20:00 祭主報告祭	【行事は一切無し】	神輿飾り ※各神輿蔵での飾り神輿 公開準備 20:00 祭主報告祭
5月3日	13:00 中神輿渡御 18:00 善学院法印社参 19:00 石原傳兵衛試楽参り 20:00 祭主試楽参り 21:30 榊渡御 23:00 祭主行列祭礼事務所出発	【18時の神事(試楽祭) 以外行事は無し】 18:00 神事	※拜殿に古神輿を飾る ※ 10:00～15:00 各神輿 蔵で飾り神輿公開 18:00 善学院法印社参 19:00 石原傳兵衛試楽参り 20:00 祭主試楽参り
5月4日	0:00 朝渡御 10:30 本楽祭(拜殿) 16:00 榊渡御 17:00 御旅所神事 (祭主・石原傳兵衛) 還御 帰り神輿	【10時30分の神事(本楽祭) 以外行事は無し】 10:30 神事(※本殿)	※ 10:00～15:00 各神輿 蔵で飾り神輿公開 10:30 本楽祭(※本殿) ※ 14:00～15:00 仮神輿 町内渡御

※印は、例年と異なった事項

な部分が例年通りではない状況で、何をやっても意味が無い」という意見もあった。

「仮神輿による渡御」の方法は、祭主による仮神輿に対する一礼や武者の存在など、なるべく本来の神輿渡御で行われていたことをやろうとするとともに、町内を回ることによって、町の人々に祭りを意識してもらい、さらに、今は休止している昼渡御のコースを回ることによって、昼渡御の復活も意図していると思われる。ただ、「歩く神輿」である仮神輿が、担ぎ手不足の現状から、「走る神輿」ではなく「歩く神輿」へ変わる前例になる可能性もあるのではないかと危惧する声もある。

氏子会会長は、祭り終了後に、「最低限のことは出来た。祭りを通じて神戸町の発展に(略)、来年は(休止している)昼渡御も出来るようにしたい」と述べている(注6)。

おわりに

コロナ禍における無形民俗文化財に対する考え方としては、久保田裕道氏が「コロナ禍における無形の民俗文化財の現状と課題」(注7)のなかで、「コロナ禍によって民俗行事が受けている影響というのは、(中略)長いこと地域の中で育まれてきた信仰や娯楽の否定にほかならない。(中略)地域の人々が活力を得るといった価値観の根源的な部分が否定される状況にあることが、無形民俗文化財の危機であり、すなわち地域社会の大きな危機」であると危機感を顕わにしている。一方、『第15回無形民俗文化財研究協議会報告書』(注8)には、参加者アンケートのなかに、何人かの伝承者は、「今回のコロナ禍について、伝承者は楽観的(いずれ収まると考えている)ののに対し、研究者の方が悲観的に考えているように思

える」と述べている、と記している。

神戸山王まつりの場合には、令和2年は実質何も出来なかったが、3年には、神輿渡御は不可能だったが、「神輿威での飾り神輿の展示」や「仮神輿による渡御」を実施した。

しかし、今まで祭りに参加していた多くの人々は、祭りが大好きで、「祭りの再開が待ち遠しくてかなわない」という人々がいる反面、好きではないが義理や付き合いで参加していたので「ぼっとしている」という人々もいる。後者の人々は、例年通り祭りが行われるようになった時、祭りに参加しようという意識は、以前通りであろうか。

一方、令和3年の実施に当たっては、「何もしないのは、祭りの衰退を現す」という意識のもとに、この状況下で「何が出来るか」を考え、特に「仮神輿による渡御」は、例年通りの祭りが行われるようになった時に、現在休止している「昼渡御」を部分復活したいという意図が含まれており、より積極的な側面を見ることが出来る。このように神戸の場合は、久保田氏のような「危機感」の部分もあるが、伝承者のような「楽観的」というよりも「積極的」な面も見取れる。祭り関係者は、この状況を「祭りをより根本的に考えるチャンス」とし、これを契機に祭りが本来もっている役割を明らかにし、その上で諸問題を分析し、その対策を考え、「神戸山王まつり」の魅力を発信し、より多くの人に興味をもってもらい、祭りに参加してもらえるように、以前にも増してやらねばならないと思っているようである。

今後この祭りがどのように展開するのか、まだ見通せないが、今回のコロナ禍が大きな曲がり角であったと振り返ることになる可能性は高いであろう。

【補筆】(令和4年3月末までの動向)

令和3年の12月頃は、ヨーロッパなどでは新型コロナウイルスの変異株であるオミクロン株が猛威を振るっていた。一方、日本では第5波が過ぎ、新型コロナウイルスはもう峠を越えて終わりに近づいているというような思いを多くの人々が感じていた。しかし、令和4年に入ると、日本でもオミクロン株が流行りだし、これまでにないスピードで感染が拡大し始めた。1月21日から岐阜県全域にも「まん延防止等重点措置」が適用された。期限は2月

13日までであったが、3月6日になりさらに21日まで延長された。神戸町においても「第6波非常事態宣言」が1月20日に出された。これは、「まん延防止等重点措置」が解除されたあとも継続し、4月10日まで延長されることになった。

一方、社会全体としては、ワクチン接種が進んだこともあり、コロナ禍はピークが過ぎたという観測も出され、コロナ後を見据え、経済・社会活動をとめないという動きが大きくなり、祭りも「保存や伝承」のため、「地域社会をつなぐ」ためとして、犬山祭や春の高山祭なども実施するという発表が行われた。

このような状況の中で、神戸山王まつりでも氏子会執行部などは、「祭りを例年通り実施したい」という思いが強く、2月17日の氏子総代会や3月10日の元六カ村との祭主決定時には、例年通りの仕方を実施する予定であるとした。

ところが、3月23日の氏子総代会、その後数回の氏子会執行部会、27日には臨時の元六カ村、氏子総代、氏子会役員(執行部・理事)、七結社(若者の団体)の会議が行われ、そのなかには、「走らなくてもよいが、神輿の渡御は行いたい」というような意見もあったが、結局、神輿の渡御は行わず、拝殿での飾り神輿とすることとなった。この結果は、山車中心の祭りとして「走る神輿」の祭りとの違いが大きいと思われる。なお、令和3年には仮神輿での渡御を行ったが、令和4年は7社の御幣の渡御を計画している。今後の新型コロナウイルスの感染状況によっては、5月3・4日の祭りはどのようになるか分からないが、原稿の締切上、祭りの約1カ月前までの様子を付記することまでで、筆を置きたい。

注

- (1) コロナ禍における祭りなどの無形の民俗文化財についての報告等は、下記のものがある。なお、ほとんどが令和2年を対象にしている。(令和3年本文執筆時)
 - ・久保田裕道「コロナ禍における無形の民俗文化財の現状と課題」、東京文化財研究所『無形文化遺産研究報告 第15号』、2021年(令和3)3月。
 - ・東京文化財研究所無形文化遺産部『新型コロナウイルス禍の無形民俗文化財：第15回無形民俗文化財研究協議会報告書』、2021年(令和3)3月。「各地の現状・課題と対応」として3名、「伝承団体の

取り組み」として5名の報告がある。その後、後半の5名を対象に「総合討議」。なお、参考資料に参加者のアンケートがあり、コロナ禍の影響についての記載がある。

・須永 敬「新型コロナ禍における祭りと民俗芸能」、『地方史研究 412』、地方史研究協議会、2021年(令和3)8月。

(2)「神戸山王まつり」について全体的に記述されたものとしては、下記のものがある。

・石原久夫『日吉神の信仰 山王まつり』、金幣社日吉神社氏子総代会、1991年(平成3)4月。

・小川和英「日吉山王まつり」、『美濃神戸 ふるさとの暮らし』、神戸町、1992年(平成4)11月。

(3)「神戸山王まつり 2020～戦後初めて消えた火～」、大垣CATV、2020年5月18日放送。30分

(4) 同前

(5)「神戸山王まつり 2021」デイリー UP Plus、大垣CATV 2021年5月10日放送。15分

(6) 同前

(7) 注(1) 参照

(8) 同前

※増補にあたって

本稿は岐阜民俗学研究会の会誌『ぎふ』に、「コロナ禍における祭りの執行とその意識～神戸山王まつりの場合～」と題して令和3年に発表したものを一部訂正し、さらに「補筆」として令和4年3月末までの動向を書き加えたものである。

(岐阜民俗学研究会員)